



ロータリー：  
変化をもたらす

## パワー浜松ロータリークラブ週報

クラブテーマ：奉仕の理想のさらなる実現に向けて

パワー浜松ロータリークラブ（2017-18年度 会長：長谷川 博久 幹事：後藤 達朗）  
〒430-7733 浜松市中区板屋町111-2 オークラクトシティホテル浜松 4307号室  
Tel: 053-452-0800 Email: info@power-hamamatsurc.jp  
http://www.power-hamamatsurc.jp

創立：2002年10月22日 認証伝達式：2003年4月29日 スポンサークラブ：浜松中RC

### 第689回例会9月12日AM7:30～

オークラクトシティホテル浜松3F チェルシーの間

- 司会：高木一浩 石原誠
- 点鐘：長谷川博久
- ゲスト：公益社団法人セーブ・ザ・チルドレンジャパン 海外事業部 吉田克弥様
- 議事：国際奉仕部会  
「シリア事業について」（病院空爆・子供の状況）

#### ■会長挨拶

おはようございます。本日は、セーブザチルドレンジャパンの吉田様が東京からお見えになっています。後ほどシリア情勢を中心とした卓話をしていただきます。大変貴重な話も聞けるとおられますので楽しみにしています。



今から18年ほど前ですがイギリスに視察に行きました。視察といっても8日間ほどですがロンドンの北にあるバーミンガム市を訪問しました。当時その市が人口100万人ぐらいでしたが公務員が27万人もいて市の財政は、ひっ迫して事業的なものは何もやれない有様でした。そうした中でいろいろな仕組み作りが始まり、グラウンドワークやPFIといった手法が活用されていました。グラウンドワークは、市民・行政・企業と3者がそれぞれ力を出し合い公園を整備したり、水路をきれいにしたりと行う事業です。日本では、三島が有名で皆様もご存知かと思われま

す。PFIは、施設の建設から運営にいたるまで民間主導で行う事業です。近年、日本でもPFIの事例が増えてきました。イギリスでは、それが盛んで学校や博物館・美術館のみならず刑務所や高速道路や橋梁までPFIで行われているものがあります。このことは、行政が財政的に厳しく財政負担を軽くするという意味合いからも注目されてきました。いろいろな問題点はありますが、こと財政面では、そうせざるを得ない状態が続いているのは事実です。

そして、チャリティの制度ですがイギリスやヨーロッパは、キリスト教文化で博愛主義が浸透し、寄付が集まる社会です。そうした中で日本と大きく違うのは、数十名規模の小さな団体でも予算規模が3億ですとかという団体が多く見受けられます。日本のNPOから比べたら

予算が100倍ぐらい違いがあります。今後の大きな課題として日本のNPOのあり方ですとか考えなきゃいけないことが多々あるかと思われま

#### ■幹事報告

- ①配布資料をご確認願います。
- ②10月11・12日に地区大会が開催されます。9月17日までに欠席の連絡をお願いします。

#### ■委員会報告

##### ◆クラブ広報委員会 安間委員長

10月16日午前10時より静岡県立浜松聴覚特別支援学校の見学を実施します。お申し込みは9月14日までにクラブ広報委員会メンバーまで。

#### ■スマイル

- ◆長谷川会長 ⇒セーブ・ザ・チルドレン吉田克弥様本日はありがとうございました。
- ◆国際奉仕部会⇒セーブ・ザ・チルドレン吉田克弥様、今後も世界規模でのご活躍をお祈りしています。
- ◆安間 孝明 ⇒運営するグループホーム入所者の鈴木祥治さんを探しています。



#### 〈出席報告〉

会員数79名（内 出席免除会員3名）  
出席数55名 出席率 73.33%  
前々回出席率 82.89%

## ■ 議事【担当：国際奉仕部会】

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン ジャパン

海外事業部 吉田克弥様

### 「シリアの子どもたちは今」

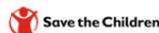


本日はこのような機会にお招きいただきありがとうございます。ありがとうございました。セーブ・ザ・チルドレン・ジャ

パンの吉田と申します。

私は前職で東ティモール、アンゴラ、スーダン等、紛争直後の国々で復興支援や地雷対策に取り組んだのち、2008年セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン入局。スリランカ駐在を経て、2013年からインドでの企業連携事業や、シリア人道支援・南スーダン人道支援などを担当してきました。私の出身は岐阜県で、幼いころは三ヶ日にミカン狩りに行くなど、浜松近郊は私にとっても、幾分か馴染みのある土地です。

#### セーブ・ザ・チルドレンとは



子どもの権利のパイオニアとして、約100年の歴史を持つ子ども支援専門の国際NGOです。1919年に英国で創立。世界のNGOの代表格として、各国政府や国連組織からも、その重要性を認められています。



2016年、セーブ・ザ・チルドレンが  
世界約120ヶ国で、直接支援を届けたい子ども  
**56,315,024人**



大人も含め91,812,417人

セーブ・ザ・チルドレン (SC) は1919年にイギリスで生まれたNGOでもうすぐ100歳の誕生日を迎えます。SCはその名の通り、「子どもたちを救う」ことを目的として活動している国際NGOです。

世界中の子どもたちは生きる権利・育つ権利・保護される権利・そして参加する権利というものを持っています。この子どもの権利を守るための国際的な枠組みとして、1989

年に国連総会の場で条約として採択されたのが子どもの権利条約です。現在は世界中、ほぼすべての国がこの条約に署名し、私たちも、この条約に基づいて活動を行っております。

赤色で記されているのがSCの活動国です。2016年、支援を行った国はおよそ120か国。支援を届けた子どもたちの数は、延べ人数にして5,600万人以上に上ります。SCは、貧しい国の子ども達、戦争や自然災害などで困っている子どもたちを助けるだけでなく、日本やヨーロッパ、アメリカといった豊かな国でも、ただ単に寄付を集めるだけでなく、大変な状況にある子どもたちのために直接の活動を行っています。

また日本ではどのような活動を行っているか、簡単にご説明させていただきます。日本でセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが設立されたのは1986年。昨年開催された創設30周年を記念してのチャリティーディナーには、天皇皇后両陛下にもご臨席を賜りました。

2017年9月現在、モンゴル・ミャンマー・レバノン・ウガンダといった国々へ7名の駐在員を派遣して、開発支援・緊急人道支援を行っています。私もそうした駐在員の一人として、スリランカで内戦直後の復興支援や教育支援に携わったことは、冒頭お伝えした通りです。

また、国内でも、昨年まで岩手・宮城・福島に事務所を持ち、東日本大震災の被害にあった子どもたちが学校に行けるように支援をしたり、街づくりに子どもたちの意見が取り入れられるように、国会議員の方々に意見を伝えるなどの活動を行ってきました。現在は子どもの貧困問題解決や、子ども虐待の予防などに向けた事業のほか、昨年の熊本地震や鳥取地震、今年7月の北九州豪雨災害などに対する緊急・復興支援を行っています。

このように当会の活動は多岐に渡りますが、今回の講演にあたり、当会のパンフレットを事前に送りさせていただいておりますので、より詳細な活動についてご興味のある方は、そちらをご覧くださいと幸いです。

こうした様々な活動の中で、本日お話しさせていただくのがシリアでの支援、そして、シリアに住んでいる子ども

ちの現状です。

2011 年以来、世界中のセーブ・ザ・チルドレンのメンバーが一丸となって、シリア国内、そして周辺国に逃れた子どもたちの支援に取り組んでいます。私自身、2014 年にシリアの周辺国を訪れ、難民となった子どもたちの状況、現地で働く職員の声を聞いてきておりますので、本日はそうした経験もふまえながらお話しさせていただきたいと思えます。

シリアは日本からほぼ真西に 8,600km ほど離れた所に位置する、中東の国です。

日本とシリアを比べてみますと、面積は日本のおよそ 2 分の 1。そこに、日本の総人口のおよそ 5 分の 1 にあたる 2,200 万人ほどが生活していました。

言語はアラビア語。宗教はイスラム教が中心ですが、キリスト教徒も少なからず存在しています。また主食はホブスと呼ばれる平べったいパンです。

私はシリアを 8 年前に訪れています。当時はイラク戦争の只中で、現在は多くの難民が発生しているシリアも、当時はイラクからの難民受け入れ国でした。シリア国内でイラク難民の子どもたち支援の可能性を探るのがシリア訪問の目的で、写真はその時に撮影したものです。その時は「また来ることになるだろう」という思いがあり、なぜかこの 1 枚しか写真を撮影しませんでした。なぜもっと写真を撮っておかなかったのだろうと悔やまれます。

### 在りし日のシリア



Save the Children

紛争前のシリアは観光地としても有名でした。フランスの植民地だった影響からか、ダマスカスの町にはカフェが立ち並び、十字軍が作った城である「クラック・デ・シュバリ工」をはじめとし、多くの世界遺産も存在しています。

1 人あたりの名目 GDP は、2010 年当時 2086US ドルで、

2014 年のフィリピンと同レベルです。中東の教育大国としても有名で就学率は 100%に近い 97%。また、ロータリーの皆さまは今回、ポリオ撲滅のためのキャンペーンを行っているとのことですが、シリアにおいてポリオは根絶状態にありました。

ところが紛争後は、世界遺産も攻撃の対象となり、100%に近かった就学率は半分の 50%にまで低下。昨年、激戦地となったシリア第 2 の都市アレッポでは、わずか 6%までに低下していると報告されています。根絶状態にあったポリオも 2013 年に再流行し、今年の 6 月から再流行の兆しを見せています。

どうしてこのような状況になったか、その背景を見てみたいと思います。

発端は 2010 年 10 月、チュニジアに端を発した「アラブの春」でした。強権的な政権に対して民主化を求める動きは、リビア・エジプト・イエメンなど周辺国での政変に繋がっていきました。

そして 2011 年 3 月、日本では東日本大震災が発生しましたが、同じころシリア各地でデモが発生し始めました。最初は平和的なデモでしたが、こうしたデモが武力で鎮圧されるようになると、国内での争いが徐々に拡大、一般の人々も巻き込まれ始めたのです。ところが、アメリカやロシアの思惑や、イラン、サウジアラビアといった周辺国の思惑もあり、国際社会は有効な手立てをとることができず、紛争は激化していきました。そして国内での混乱の虚を突いた IS が台頭し、紛争は泥沼化していったのです。

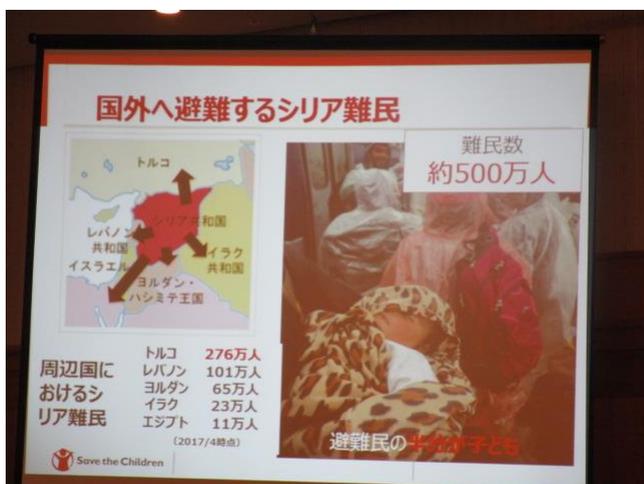
2017 年 9 月現在、命を落とした人々の数は 33 万人以上。犠牲者のうち約 3 分の 1 が民間人で、1 万 8,000 人以上の子ども、1 万 1,000 人以上の女性が死者に含まれているとシリア人権監視団は訴えています。

33 万人と言ってもすぐには実感がわかないかもしれませんが、東海地方の都市でたとえると、豊橋市の総人口およそ 37 万人に匹敵する数の人々が命を落とした計算になります。

シリア国内で故郷を追われ、逃げ惑っている国内避難民は

およそ 650 万人。シリアの国民のおよそ 3 分の一が家を追われて逃げ惑っている計算になります。また難民として国外に逃れた人は約 500 万人。もっとも多くの難民を受けれているのはトルコで、276 万人。名古屋市の人口よりも多い数です。またレバノンはおよそ 100 万人の難民を受け入れています。レバノンの人口は 400 万人ですので、人口の 4 人に一人が難民という状況です。

また、こうした難民のうち、ヨーロッパに逃れてきた難民は 130 万人以上に上ります。そのうち、100 万人がギリシャ、30 万人がイタリアに逃れてきています。そのうち 5 万人以上が海を越えてヨーロッパに渡ろうとし、1 割にあたる 5 千人以上が海で命を落としています。こうした人々を救うために、SC は救助船を運航し、7,600 人以上の人々を救助してきました。



それではシリア国内の最近の状況がどうなっているか、見てみましょう。

7月29日午後、シリア北西部イドリブで、SCが過去2年以上支援してきた産科病院が空爆されました。空爆を受けた病院は、地域で唯一の出産設備のある産科病院で、空爆時、病院では2件の手術が行われており、1名の妊婦が出産中でした。

その1週間後、そこから西に位置する都市アレッポの農村地帯で空爆が相次ぎました。

今年に入っても、3月21日には、SCのパートナー団体が支援する学校上空に、おびただしい数のジェット機が飛来し、学校から自宅に避難した子どもたちが、爆撃の犠牲になりました。

そしてその1か月後の4月4日には、これは日本でも報道

されましたが、イドリブの街で化学兵器とみられる攻撃がなされています。SCのパートナー団体であるシリア・リリーフが運営する病院の医師たちによると、病院に運ばれてきた子どもたちには、鼻水や瞳孔の縮小を伴う呼吸困難や意識障害など、サリンのような神経ガスにさらされた兆候が見られました。

そして先月からは、ISが首都と称する街ラッカへの攻撃が本格化しています。ここでその場に言わせた子どもたちの声を聞いてみたいと思います。

一人目は12歳のヤコブさん。彼は、IS占領下のラッカでISの戦闘員が見せしめの為に多くの市民を斬首し、その首が町の中心部に並べられていたと話していました。

また13歳のファリダさんは、家族と一緒に逃げる途中、砲弾の破片が弟の額に突き刺さり、大けがをしたと話してくれました。

こうした状況に対し、SCは幅広い分野で活動しています。シリア国内では、戦闘地域から逃れてきたヤコブさんやファリダさんのような子どもたちや、その家族に対して、パートナー団体との連携の元、命を救うための活動を展開しています。これまでに食料配布を4千人以上に行ったほか、医療チームを展開し栄養不良や病気の子どもの手当を千人近くの患者に対して行ってきているほか、ポリオの予防接種なども行っています。

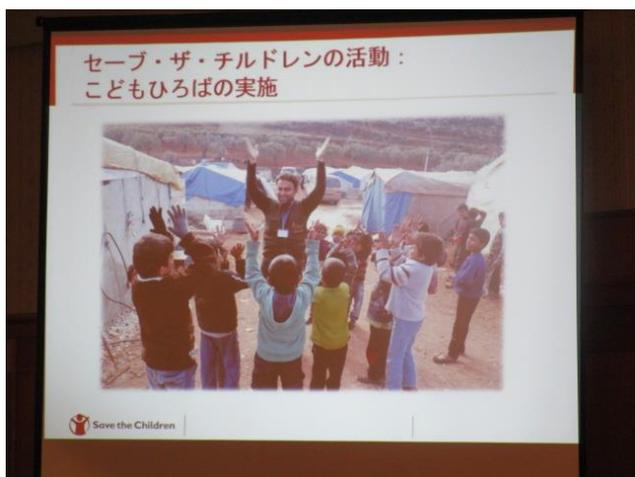
また、今は9月ですが、これから数週間もすると、シリアやトルコ、レバノンといった国々の山岳地帯では寒さが本格化します。そのため、2千500人分の乳幼児キットや防寒具の提供など越冬支援物資も準備しています。

加えて、避難する中で、両親や親族と離れてしまった子どもたちが多くの数にのぼることも報告されています。したがって、子どもの保護もやはり喫緊の課題です。SCはパートナー団体にこうした子どもたちのチェックリストや登録の仕方などのノウハウを提供し、家族との再会や、死別してしまった両親に替わる保護者探しなどを行うとともに、「こどもひろば」の実施を行っています。

「こどもひろば」とは、緊急下でも大人たちに守られ、安全に遊び、子どもたちが日常生活を取り戻すことができる

ように配慮した場所です。「こどもひろば」を作るこの意味ですが、ただまちまちに遊ぶのではなく、スタッフがいて安全が保たれている、そしてその中で無計画に過ごすのではなく、計画性を持ってすごし、日常の規律などを作り出せるようにする、そして搾取や虐待からも子どもたちを保護する、さらに訓練されたスタッフがいることで問題を抱えている子どもを発見し、適切な機関に繋げるといった様々な役割があります。

ちなみに CFS は紛争地域だけでなく、日本国内でも、東日本大震災、熊本地震などで実施してきています。



ここで「こどもひろば」に参加した子どもたちの声を紹介させていただきます。一人目は 14 歳のカマルさん。今は隣国ヨルダンの難民キャンプで暮らし、「こどもひろば」に通っています。「シリア国内で避難生活を送っていた時は、イライラしがちだったけれど、「こどもひろばで同世代の友達と接する中で、自分自身をコントロールする術を身につけることができました」と語ってくれました。

もう一人は 7 歳のイブラヒムさん。先ほど惨状を紹介したラッカから、情勢の落ち着いたシリア北東部の避難民キャンプに逃れてきました。「こどもひろば」の活動に参加することで、こんな素敵な笑顔を見せてくれるようになりました。イブラヒムさんはお絵かきの最中ですが、絵を描くというのは、口に出せないメッセージを伝えられるなど、「こどもひろば」には欠かせない活動のひとつです。

子どもたちの描く絵には、シリアにいたころの、平和で楽しかった生活を思い出したもの、空爆直後の凄惨な状況を描いたもの、避難生活の大変さを描いたものなど、様々です。

こうした様々な思いを抱く子どもたちを受けとめ、笑顔を取り戻すのが、「こどもひろば」の役目のひとつなのです。ですが、シリア国内では多くの街がいまだに包囲され、物資や食料の欠乏に苦しむ人々の数が 75 万人にも達しています。SC はシリア紛争のすべての関係者に、こうした包囲を解く努力をすること、そして学校や医療施設などを攻撃目標としないことなどを訴えています。

私は 2014 年にシリア周辺国を訪れたとお伝えしましたが、そこであった SC のスタッフの話をさせてください。

シリア国内は情勢が危険すぎるので、外国人スタッフは身の安全の確保のため、国内には入れず、隣国からシリア国内で働くシリア人スタッフとやり取りをしながら活動を進めています。写真は、子どもの保護に従事するシリア人スタッフです。彼女は「シリアでは日々空爆の危険にさらされるし、シリアに戻って働くことはやはり怖いですが、でも、私の生まれ育った町だし、その町の為に、私は私の力で出来ることをしたいと思っています」

私たちは、やむを得ないとはいえ、安全な場所で働き、本当に辛くなったら辞めることもできます。ですが、シリア人である彼女は逃げ場がない。それにもかかわらず、自分の街の為に、自分の町に住む子どもたちの為に働く彼女に、私はただ敬服するのみでした。

こちらはレバノンでシリアから逃れてきた難民の人たちと、何が必要かを聞き取っている SC のスタッフです。こうした、献身的なスタッフが世界中にいたことが、私たち SC の強みだと思っています。

セーブ・ザ・チルドレンは、なぜ、遠く離れた国々の子どもたちを支援するのでしょうか？

「円全面高。米国のシリア空爆でリスク回避」これは今年 4 月 7 日のニュースです。

それに先立つ 2 月、「シリア難民、300 人規模で日本受け入れへ」というニュースも配信されました。

グローバル化した社会に住む今日、世界中のあらゆる出来事は、直接的であれ、間接的であれ、私たちの生活と繋がっています。

貧困、紛争、ガバナンス、自然災害、テロ、環境汚染、温暖化など、このままでは地球そのものが持たないという危機感を誰もが持ったことがあるのではないのでしょうか。

- ・世界中の人が先進国の暮らし方をすると、地球が 2.3 個必要
- ・世界の最富裕層の 1% は、世界の富の 50% 以上を所有
- ・地球全体の海面は 20 世紀中に 17 センチ上昇。この 10 年間はその 2 倍の早さで上昇
- ・自然災害は 1970 年代と比較してこの 10 年間は発生件数、被災者数が約 3 倍に
- ・2014 年の紛争・戦争の死者数は、前年と比較し 28% 増加
- ・テロの犠牲者 3 万人、難民・避難民・亡命申請者は 6530 万人→増加の一途

我々の住む世界は、このままのまつのだろうか、という思いは今や多くの人の中に共有されていると思います。

こうした危機感の中、今からちょうど 2 年前。2015 年 9 月に、国際連合の特別サミットにおいて全会一致で採択されたのが、持続可能な開発目標への取り組み。Sustainable Development Goals。SDGs と呼ばれるものです。

政府、NGO をはじめとする市民社会、経済界が共に意見を出しあい、国連が取りまとめを行って、この世界を持続可能なものとして行くために、2030 年までに、人類として達成すべき目標を 17 個に分けたものです。今回お話ししたシリアの問題は、この目標の 16 番目と 17 番目に相当するでしょう。

その他にも、貧困の削減、教育、自然環境など、私たちが生活をしていくうえで欠かすことができない要素が、ここには目標として取り上げられています。

そして SDGs は国、企業、地域コミュニティ、NGO や NPO、そして個人が力を合わせることで達成できるものです。

本日は経営者の方々も多くご来場されているかと存じます。この世界共通の取り組みに対して、皆様が日々取り組んでおられる事業がどの目標に関連するか考えていただくことも、皆様の事業の価値を高め、ひいてはこの世界をより良いものにしていくことに通じるのではないかと思います。

最後に、シリアの子どもの声を紹介させていただきます。

『世界の子どもたちへ、私からのメッセージです。  
みなさんに「何かをください」ってお願いするわけではありません。ただ、私の国で起きていることを、みなさんに知ってほしいのです。  
私の国では、中に人がいるのに、家が壊されたり、子どもたちがひどいあつかいを受け殺されたりしています。

私のおじさんは殺され、いここは死んでしまいました。  
私大好きだった学校も、壊されました。  
私の友だちも何人も殺されました。  
私の家も、こわされ、燃えてしまいました。

私はとても悲しいです。  
このようなことが、みなさんには起こりませんようにと、願っています。』

シリアで最初にデモが始まった時、最初に人が殺されたというニュースがあった時、世界は無関心でした。無関心がここまで事態を悪化させました。そういう意味でシリアと世界は繋がっています。

あなたには起こらないようにと願いますという、この子の想い。かけがえのない、私たちの世界を守るために、そのための目標である SDGs の達成の為に、私たちの事業の延長線上で何ができるのか。この講演が、考えるきっかけとなりますと幸いです。

本日はどうもありがとうございました。

